

Native Son を通しての Wright の主張

鈴木孝子

(1) Bigger と恐怖

Bigger の一日は、薄汚いアパートの一室に出たねずみをフライパンでたたき殺す場面から始まり、その晩、雇い主でもある富裕な白人の一人娘 Mary を殺害してベッドにもぐりこむところで終わっている。死で始まり、死で終わる彼の象徴的な一日は、緊迫した恐怖が一面に張りつめている。彼の行動のエネルギー源となるものは恐怖であり、恐怖なくして黒人は存在しないことを痛感させられる。Bigger は、自分がつらい貧困・みじめな屈辱・やりきれない欲求不満の毎日を永久に送る運命にあることを心の奥底では知っていた。それがほとんどの黒人が送る一生なのである。彼がこうしたことを自覚しながらも、暴力をふるい、悪態をつき、破廉恥な行為に及ぶのは、一般の従順な黒人性よりも、はるかに一個の人間性を求めていた証拠である。彼は自分を否定し、荒っぽいふるまいをして、うっぷんをはらすのであった。

He knew that the moment he allowed what his life meant to enter fully into his consciousness, he would either kill himself or someone else.⁽¹⁾

このように彼が最も恐れているのは、アメリカ社会における自分の存在をありのままに認識することであった。黒人としてのみじめな存在を認めてしまえば、待っているのは自己嫌悪だけである。Bigger はいつも恐怖に支配されていた。彼の恐怖を撲殺するものは、暴力であり、憎悪はすべてこの恐怖の副産物なのであった。Bigger は朝っぱらから仲間と通りをうろつき、怖気づきながらも白人の店に押し入る計画を立てる。

ところが、仲間の一人 Gus だけが色好い返事をしない。心の中では彼がこの計画をおけるといふのを願っているだけに、返事をしづる Gus に対して不安を抱く。もし彼が承知すれば、この計画を実行に移さなければならぬ。そう考えると白人に対する恐怖が Gus に対する恐怖にすり変わり、激しい憎悪の炎が燃え上がり、殴り合いのけんかになる。結局、Bigger は暴力でこの計画を破壊し、恐怖を撲滅してしまうのであった。

大きな恐怖は、自動的に大きな暴力を作り出す。このように条件づけられた Bigger は、殺意なしに Mary 殺害事件を引き起こす。盲目の Dalton 夫人が、Mary の部屋に突然ぼやけた白い姿で現われた時、彼はヒステリックな恐怖にかられ枕を Mary の顔に押しあてて窒息死させてしまった。この行為は事故であり、また同時に事故でない。殺人によって明らかにされていく Bigger の日常生活に根ざす白人に対して抑えることのできない恐怖は、彼の罪ではなく、アメリカの罪なのである。彼は、過失から生じたものであるが殺人という大罪を逸れようとせず、むしろ進んで受け入れている。そうすることによって、Bigger は初めて自分の存在を実感し、解放感に浸り、一種の誇りすら覚えるのであった。なぜなら、彼にとってこれ程自分の存在を明確に跡づけてくれるものは、他になかったからである。Bigger の日常生活のうちでもう一つ彼の心をいつも占めているのは、激しい被強奪意識である。

We live here and they live there. We black and they white. They got things and we ain't. They do things and we can't. It's just like living in jail. Half the time I feel like I'm on the outside of the world peeping in through a knot-hole in the fence.⁽²⁾

彼はアメリカ文化の一隅に生活しながら、絶えず支配的文明のきらびやかさによって苦しめられている。時間つぶしに入った映画館で上映されていた“The Gay Woman”は、彼が永久に締め出されている世界、例

えば、パーティ・ゴルフ・くるくる回るルーレットなどを象徴し、**Bigger** に絶望感を味わわせるだけであった。耐え切れない空虚な生活を満たすために彼は、「何か」——白人に対する恐怖に打ち勝つための「何か」を求め続ける。それは未遂に終わった強盗計画でもよかったし、実際に雇われた Dalton 家の運転手兼下働きの仕事でもよかった。しかし、最後には殺人を犯すことによって、彼は自己を発見し、空虚な毎日と永訣するのであった。

It must have been good ! When a man kills, it's for something... I didn't know I was really alive in this world until I felt things hard enough to kill for'em.⁽³⁾

この **Bigger** の悲惨な叫びは、アメリカ社会にしいたげられている黒人の核心に触れる真の声であり、**Wright** の主張が強く胸につきささってくる。黒人は人を殺す以前から、この世に生まれてくる以前から有罪であると、白人が無意識に抱いている観念的な考えに彼は直撃を与えている。

また **Wright** は、次のことを明らかにしている。一つは、白人と黒人がお互いに持っている盲目性についてである。殺人によって人生観が一変する以前の **Bigger** は、黒人生活のすべての現実から目を閉ざしていた。また生まれながらの強い恐怖と圧迫感と白人の人間性にも目を閉ざし、白人と言えば恐怖の象徴と思いこんでいるために **Jan** のさし出した手を握ることができない。 **Bigger** が目を開くのは **Mary** と **Bessie** を殺害して心の中に堆積された精神的な反逆が実現化されてからである。開眼の結果、 **Bigger** は家族も友だちも以前の彼のように盲目であることを知ると同時に、白人が自分の人間性に対していかに盲目であるかに気づく。白人は、黒人と言えば無知で乱暴であり、更にジャズ歌手にみられる陽気さや、スポーツ選手にみられる肉体的な敏捷さなどをまず思い浮かべる。 **Bigger** のように自我が強く、感受性に富み、白人にも勝る知

性を備えた黒人のいることを忘れている。この白人の盲目性を利用して、彼は Mary 殺害後、ある誘拐殺人事件にヒントを得て Dalton 夫妻から身代金を取る計画を立て、無理やり相棒にしたた愛人 Bessie に次のように述べている。

They might think the reds is doing it. They won't think we did. They don't think we got enough guts to do it. They think niggers is too scared...⁽⁴⁾

Dalton 夫妻は黒人の大学や福祉施設に多額の寄付をしているが、一方では Bigger の住む貧民街の古ぼけたアパートの持ち主であり、黒人の本当の生活、気持などは理解していない。Dalton 夫妻は、娘が殺された後も Bigger に復讐的な気持は抱かず、今だに South Side の少年クラブにピンポン台を十台寄贈しているくらいである。彼らは黒人を自分たちと同等の人間としてではなく、白人の下に位置する Negro 民族として扱い、恩恵を施し、自己満足しているにすぎない。Bigger の真の欲求は、黒人としてではなく、一人の個性ある人間として理解されたいということであった。

もう一つは、Wright の作品において、Bigger が恐怖によってふるう暴力は、黒人にとって自然の行為であり、少しも罪の意識を持っていないことである。

I don't know. Maybe this sounds crazy. Maybe they going to burn me in the electric chair of feeling this way. But I ain't worried none about them women. I killed. For a little while I was free. I was doing something. It was wrong, but I was feeling all right. Maybe God'll get me for it. If He do, all right. But I ain't worried. I killed 'em 'cause I was scared and mad. But I been scared and mad all my life and after I killed that first

woman, I wasn't scared no more for a little while.⁽⁵⁾

このことばからわかるようにこの感じ方は、正当防衛とはもちろん違う異質のものである。すべての物事に対する考え方の基準は、対等な人間の間になり立つものであり、白人と黒人の間には成立し得ない。アメリカ社会の法律・原則・制度のどれも、虐待されつづけてきた黒人にとっては憎い敵であった。Bigger はアメリカ社会が彼に強制したとおりの生き方で生きたにすぎず、二人の女性の死を引き起こした行為は殺人ではなく、人間が日常、呼吸をしたり、まばたきをしたりするのと同じように本能的なことなのであった。Wright は、この作品の読者すべてに単なる同情だけでなく、Bigger を作り上げたアメリカ社会の矛盾を指摘し、その罪悪感と責任から逃れられないことを深く印象づけている。

(2) Wright と Dreiser

Native Son (1940) と *An American Tragedy* (1925) は、同じ Naturalism の系統を受けつぐものとしてしばしば比較されるが、それはひと言でいうなら、『人間は環境の産物である。』という theme につきる。内容の展開において *An American Tragedy* は、伝道所や街頭を布教してまわる貧しい両親のもとで育った主人公 Clyde が「成功の夢」にとりつかれ、華やかな上流社会に加わるためにじゃまになった恋人 Roberta を殺して、電気椅子に送られるまでの過程を Clyde の環境・社会的、経済状態などから同情的に描いている。一方、*Native Son* は、ふとした過失から大金持の一人娘 Mary を殺してしまった黒人 Bigger の絶えず恐怖と圧迫にとりつかれた心理状態から、アメリカにおける黒人へのきびしい差別、暗黙のうちに拘束されている自由、みじめな環境とその待遇などの真の姿をありのままに描き出している点は異なるが、Wright も Theodore Dreiser (1871~1945) も、いかにして Clyde と Bigger の犯した殺人が起るかを許すわけではないにしろ、何とか説明できるような現実の社会的背景、人間の心理を掲示することによって、

人間がいかに周囲の環境に無力であるかを訴え、人間性の失われた巨大なアメリカ社会を批判し、彼らの犯した殺人が歪められた社会の中で不可避的なものになっていることを強調している。

まず Wright と Dreiser の生いたちに焦点を当ててみると両者とも似ている点が多い。貧困の中に生まれ、満身に教育を受けられない少年時代を送り、Wright は19歳の時、Dreiser は17歳の時、Chicago に出て何度も職を変えて働きながら文筆生活に入っている。1929年10月に始まった不況の中で Dreiser は、貧富の差が激しく資本家が莫大な利益をあげている反面では、一般の労働者や市民が自由を抑圧され、低賃金で苦しんでいる物質主義的なアメリカの資本主義体制を批判し、政治や社会活動に関心を持つようになり、晩年（1945年）には共産党に入党している。Wright も進歩的な芸術家団体 The Chicago John Reed Club に加わり創作活動をつづけるが、人種差別の厚い壁から逃れられず、自由と平等を求めて1933年共産党に入党するに至る。

Stephen Crane (1871~1900)、Frank Norris (1870~1902)、Jack London (1876~1916)、Dreiser に代表されるアメリカの Naturalism は、現実をありのままに描き出すために観察を唯一の手段として用いるが、人間を環境の産物とみなす傾向が非常に強い。その点においては、Naturalism の末期に登場した Wright も黒人を一個の人間としてではなく、全体として環境の産物とみなす傾向がみられる。彼は理性的には、自分は黒人ではなくアメリカ人であると自覚していたと思われる。それは、同胞である無気力で白人の支配力を甘受している黒人を軽蔑し、彼らからも脱出したいと願っていたことから明白である。

しかし、Wright と Dreiser の決定的な相違は Dreiser が白人であり、Wright が黒人であるという事実から、両者の社会批判は本質的には一致しないと思われる。An American Tragedy の Clyde は、アメリカ人だけに限らず日本人にも、西洋人の中にも存在し得るが、Native Son の Bigger は黒人という限られた人種の中にしか存在しない。どんなにひどい環境の中で生まれても、黒人としてこの世に『生』を受けること

に比べれば、はるかに豊かな人間性を与えられている。Clyde は、たまたま貧しい家庭に生まれたにすぎず、強固な意志と絶え間のない努力でそれを克服する可能性はあったはずである。上流社会には属さなくとも、伯父 Samuel Griffiths の会社で係長の地位を与えられ、生活も身分も保障され彼という人間の存在は認められていたではないか。しかし、アメリカ社会で生まれたアメリカ人であるにもかかわらず、単に皮膚の色が黒いというだけで、Bigger は自由な行動・表現・生活をする権利などのすべての人間性を剝奪されている。何の可能性もない抑圧された宿命的な世界に生きる黒人は、何の価値もない『無』の存在なのであった。

アメリカ社会における黒人の存在に対する認識は、1619年アフリカの黒人が奴隷として、Virginia に陸揚げされて以来の長い歴史を通して育てられた認識と少しも変わってはいない。白人の支配下で歪められた黒人の人間性は、我々の想像の域を絶するものであろう。白であろうが、黒であろうが、同じ人間に変わりはないという理知的な考えでは及びもつかない程、せっぱつまった感情的なものを Wright はアメリカ社会全体、世界全体に問いただしている。

(3) 対黒人観

Wright は母親が彼を孤児院に引き取りにきた時のことを *Black Boy* (1945) に次のように書いている。

The moment I had learned that I was to leave, my feelings had recoiled so sharply and quickly from the home that the children simply did not exist for me any more. Their faces possessed the power of evoking in me a million memories that I longed to forget, and instead of my leaving drawing me to them in communion, it had flung me forever beyond them. I was so eager to be gone that when I stood in the front hallway, packed and ready, I did not even think of saying good-

bye to the boys and girls with whom I had eaten and slept and lived for so many weeks.⁽⁶⁾

彼の黒人からの脱出は、すでにここから始まっている。6歳にも満たない頃から、母親が仕事を捜しに出かけている間、ひとりぼっちで留守番をしていることが多かったため、近所の子供たちと遊ぶこともなく、団体生活を経験することもなく、自分一人の孤独な空想の世界で育った Wright は、同じ屋根の下で暮し、同じ皮膚の色をした、同じ境遇の子供たちにさえ心を許そうとはしなかった。好奇心に満ちあふれた彼は、スポンジが水を吸い上げるように手近の様々な知識を吸収し、ひたすら未知の世界へ、やがて暗闇の世界へと前進していったのである。

自我の目覚め、すなわち自己と他の区別ができるようになった時、彼は初めて白人を恐れるようになるが、恐怖の始まりは彼の叔父が白人に意味なく殺されたことから起こる。

There was no funeral. There was no music. There was no period of mourning. There were no flowers. There were only silence, quiet weeping, whispers, and fear. I did not know when or where Uncle Hoskins was buried.⁽⁷⁾

叔父の死を囲んで家族はただ白人を恐怖するばかりであり、幼な心にも Wright は白人の横暴さに対する怒りと、黒人の無気力さに対する驚きという二重の衝撃を受け、黒人に対する不信の念が高まっていくのであった。また彼が南部の黒人の盲目的な服従に耐えることができなかったのは、貧困のため Helena, Jackson, Memphis とあちこちに移り住み、一つの黒人社会に長期間滞在することがなかったため、黒人の敗北的習慣を身につける余裕がなかったからと思われる。

彼にはもちろん黒人を扇動する才覚もないが、強烈な自我のため、白人の支配下でおとなしく暮らせるはずもなかった。また実際に、黒人た

ちはあまりにも知性と教養に欠け、無知で一致団結して白人に対決しようとする気力さえ持たなかった。Wright の信心深い母親や黒人の牧師・教師も白人社会の一步手前に線を引き、その中で彼に「黒人らしさ」を説いたにすぎなかった。Wright にとって、従順な黒人も白人と同じように自分の自由を強奪するにちがいないとしか思えなかったのである。

And the problem of living as a Negro was cold and hard. What was it that made the hate of whites for blacks so steady, seemingly so woven into the texture of things? What kind of life was possible under that hate? How had this hate come to be?⁽⁸⁾

白人世界に対して公然と反逆することもできず、奴隸的生活を甘受することもできなかった彼は、自分が何であるか、何になり得るかを知るために抵抗と脱出を試みるのであったが、Wright の体を流れる黒い血は、南部からどうしても脱出できない運命を彼に与えているのであった。

Yet, deep down, I knew that I could never really leave the South, for my feelings had already been formed by the South, for there had been slowly instilled into my personality and consciousness, black though I was, the culture of the South. So, in leaving, I was taking a part of the South to transplant in alien soil, to see if it could grow differently, if it could drink of new and cool rains, bend in strange winds, respond to the warmth of other suns, and, perhaps, to bloom ...⁽⁹⁾

自己発見、自己主張を試み、作品を通して幾度となく黒人の苦悶を訴えてきた Wright ではあるが、彼の人種的な劣等感は、彼の根底に無意識に流れる恐怖とともにますます激しくなる。自由と平等をうたい文句

に掲げる共産党にも、彼は依然として違和感を感じるだけで、彼の真の complex は消えなかった。この complex は、心の内へ内へと向い、やがて南部を拒否し、同胞を捨て、結局彼は絶望と挫折から自己を守り抜くためにアメリカ社会を脱出するに至るのであった。

Notes

- (1) Richard Wright : *Native Son* p. 14.
- (2) *Ibid.*, p. 23.
- (3) *Ibid.*, p. 392.
- (4) *Ibid.*, p. 139.
- (5) *Ibid.*, p. 328.
- (6) Richard Wright : *Black Boy* p. 44.
- (7) *Ibid.*, pp. 63—64.
- (8) *Ibid.*, p. 180.
- (9) *Ibid.*, p. 284.